

訪中記から見る中国との再会——火野葦平『赤い国の旅人』論

小島秋良

キーワード：中国再訪、火野葦平、紀行文学、日中文化交流、戦後日中関係

1. はじめに

1937年火野葦平は一兵士として中国を訪れた。その後日中戦争従軍経験をもとに書いた「麦と兵隊」をはじめとする数々の作品により、一躍有名作家となっていく。「兵隊作家」としての火野のイメージは敗戦後も続き、中国で過ごした約2年間で作家活動に与えた影響は無視できない。一方で火野と中国との関係は敗戦で途絶えたわけではなく、1955年に再び訪中する。本稿ではこの再訪経験をもとに日記形式で書かれた『赤い国の旅人』（朝日新聞社、1955年）を取り上げ、かつての戦地を再び訪れその経験を言語化する点に着目する。

1949年に成立した中華人民共和国は、1950年代半ば以降様々な国の人々を「新中国」に招待する外交政策をとった。従って日本においても本作品が書かれた1955年当時、中国政府から招待を受け訪中する人々が増加していた。それに伴い、多くの紀行文や報告記が世に出されたが、その中で『赤い国の旅人』はどのように読まれていたのだろうか。

同時代評では、「大切なひとすじの思いが貫通している。日本人ならば、だれでも感じていなければならないはずの、中国侵略に対する一種の罪悪感である」¹「政治的なものに片寄らず公平な目で見ているのが快い」²「すべての構え、すべての固定観念を捨てて、自分の生身でじかに中国にふれ、自分をたしかめようとしている作家としての誠実さは、いままでのどんな中国旅行者のそれよりも信頼できる気がする」³など全体的に高く評価された。特にここで着目したい点は、当時の「新中国」における共産党への見方や、中国に対して抱く罪悪感、贖罪意識を取り上げ、他の訪中記と比較しても作者「火野葦平」の態度や立場を信頼できるものとしていることである。

一方批判として、中国側から招待され旅費も出してもらい訪中することに対し「旅行の動機における不純」を感じるというものもある。本作の内容が国内にいる常識的な人々の抱く感想と変わらないとし、中国まで行かなくても書けると批判するのだ⁴。

確かに『赤い国の旅人』に書かれる新中国の様子は、他の訪中記で書かれる情報と共通する部分が多々ある。それは中国側が「お客」としての外国人に見せたい「新中国」の側面がある程度固定化しており、決まった一種の観光コースを回っているためだ。ただし、当時から他の訪中記とは異なるとして評価

1 亀井勝一郎「文芸時評」『読売新聞』1955.10.3

2 浅見淵「十月の文芸、総合誌諸作品」『河北新報』1955.10.5

3 臼井吉見「文芸時評」『朝日新聞』1955.11.19

4 佐々木基一「文芸批評 火野葦平「赤い国の旅人」」(文芸12月号)『近代文学』1956.1.1

されていた箇所はやはり注目すべきだろう。このような否定的な評価は、ごく少数であった。

その後の火野葦平研究においても、本作品は「旧中国に対して犯した暗い自責を経糸とし、新中国の力の政治に対する反発と疑義を緯糸として織りなした精神の記録」⁵と評価されてきた。また2010年代以降、新資料である火野が訪中当時つけていた「中国旅日記」と本作品との比較が行われている。そこでは火野が見たものを一旦自己から切り離した上で意見や見解が加えられており、本作品が「正直に記していこうという試み」⁶であるとする。これらは、同時代評に見られる訪中者としての火野の態度を好意的に受け取った要素とも重なる。

一方で、火野自身が「普通のルポルタージュや視察記ではなく、自分の精神の問題としての旅行記、また一個の文学作品となるような魂の記録」⁷を目指した本作品の「文学作品」、すなわち創作部分に関する言及は多くはない。そのため本稿では「私」の語りの部分に着目し、その特徴を明らかにするためにも他の訪中記との比較を行う。ルポルタージュや紀行文は自分の経験(事実)を書いたものではあるが、その経験のうち何を書くかまたは書かないかという取捨選択や、経験をどのように語るかという表現の選択が行われており、そこには書き手による創作行為が生じている。敗戦から約10年後の1950年代半ばにおいて、中国を訪れた人々はどのように自身の経験を言語化し作品として残していったのか。以上を踏まえ、『赤い国の旅人』を1950年代半ばの中国認識を考える手がかりの一つとして捉え、同時代における作品の位置付けを明らかにしたい。このような分析は、敗戦、中華人民共和国の成立といった歴史的变化を経て、日本が中国と向き合う際、忘れ去られがちであった戦時中との連続性を考える端緒にもなるだろう。さらにこの連続性が過去のみを指すのではなく、国交正常化以降の日中文化交流へと続くものでもあることを指摘したい。

なお、『赤い国の旅人』は、初め『文芸』1955年10月号から12月号に連載されたが、「諸事情」により未完のままとなった。増田は、当時「赤色全体主義ファッション体制」の描写掲載に慎重ならざるを得なかった『文芸』の編集方針が影響しているのではと指摘している⁸。本稿では完成版である初刊『赤い国の旅人』(朝日新聞社、1955年)を底本として使用する。

5 田中艸太郎『火野葦平論』五月書房、1971、p.173

6 増田周子「火野葦平「赤い国の旅人」の成立と新中国認識」『関西大学東西学術研究所紀要』44、2011.4

7 『赤い国の旅人』「後書」p.310

8 6に同じ

2. 火野の訪中と1955年前後の日中関係

火野が1955年に出国した本来の目的は、1955年4月6日から10日までインドのニューデリーで開催されたアジア諸国会議へ参加するためであった。この会議は、「政治、経済、文化の諸分野におけるアジア諸国民共同の諸問題について、あらゆる政治的、思想的立場の人々の間で自由に意見を交換する」という目的のもと14カ国の代表約200名が参加した⁹。

9 アジア諸国会議日本準備委員会編『十四億人の声』おりぞん社、1955、p.5、p.207

日本代表団は、日中友好協会会長やアジア民族親善協会会長を務める松本治一郎が団長となり、他33名の代表および2名のオブザーバーから構成された。火野自身は全九州平和連絡協会の推薦を受け¹⁰、「文化問題」の日本代表という立場で参加した。

アジア諸国会議終了後、中国側から招待を受け、会議参加者のうち28名が訪中団体として中国を訪れる。当時中国側は日本との接触の窓口として様々な協会や連合会を設けていたが、アジア諸国会議に参加した中国代表団団長の郭沫若は中国人民保衛和平委員会の首席でもあった¹¹。『赤い国の旅人』の中で「私たちは正式には中国人民保衛^(支那)世界和平委員会の招待になる」¹²という記述があるため、このつながりで訪中が実現したと言える。

1955年当時は、言うまでもなく日中両国の正式な国交は結ばれていなかった。しかし、中国政府は対日政策として1953年頃から「民間外交」を推進する¹³。当時日中間を行き来した正確な人数は不明だが、中国研究所による「日中両国人民の往来数」¹⁴では、火野が訪中した1955年は日本人訪中者のうち団体が52、個人が847となっており前年の団体21、個人192から大幅に増加している。しかし、このような「民間外交」による日本人の訪中は長くは続かず、1958年長崎国旗事件以降、急速に沈滞していくことになる。その後1962年にLT貿易が開始されたことで再び訪中者は増加するが、1960年に没した火野にとって生前再び訪中が可能となった背景には、1950年代半ばに見られた一時的な「民間外交」の盛り上がり関係している。

当時の中国訪問は、決して戦争の反省にもとづく考えの中で行われたわけではなく、選挙出馬の際箔を付けるためといった動機や、共産主義賞賛のためという組織的なつながりで訪中する者もいた。しかし、日本人が抱いていた中国に対する侮辱感を弱め、日中両国民の間に親近感を与えるなど、一定の成果を収めることに成功した¹⁵。

その成功の要因として、直接中国を訪問し見聞きした人の存在のみではなく、彼らがその経験を作品化した訪中記を、国内の人々が読むことでより広範囲にわたって影響を及ぼしたことも関係しているだろう。中華人民共和国成立後、自由な行き来ができず中国の情報は遮断されていた。そのため直接中国を訪れた人々からもたらされる「新中国」の情報は、当時貴重なものとして受け取られていた。その上で、これらの紀行文や報告記の問題点として以下のことが指摘されている。

第一に、新中国の新しさを強調するあまりか、旧中国との連続性についてはほとんど顧慮されていないことである。第二に、中国の人々と通訳を介してではあるもののじかに接しえたことの感動を隠さず表明していながら、賓客待遇の心地よさをそのまま享受しているような、ある種の能天気さが感じとられ、特定の個人との深い交友関係を裏づけるような記述に乏しいことである¹⁶。

10
「近藤委員長アジア諸国会議へ」『日本文学』4(4)、1955.4

11
岩村三千夫「戦後日中友好運動の歩み」『中国研究月報』180、1963.2

12
『赤い国の旅人』p.103

13
毛里和子『日中関係—戦後から新時代へ』岩波書店、2006、p.22

14
中国研究所編「資料 統計〔参考統計〕5.日中両国人民の往来数」『新中国年鑑1970年版』大修館書店、1970、p.302。表の注意書きに「団体数は個人訪問を含めているので、正確とはいえない」とある。

15
11に同じ

16
馬場公彦『戦後日本人の中国像 日本敗戦から文化大革命・日中復交まで』新曜社、2010、p.149

当時の訪中では中国側が招待し、旅費も中国側が大部分を負担していた¹⁷。また日本側は招待された後、反対に同程度の中国人を日本に招待するという相互交流を行ったわけではない。そのため訪中した日本人が「お客」という立場でもてなされることに満足し、彼らからもたらされる紀行文は「新中国」の浅い表面だけをなぞるような報告になりがちであった。また中国側も国外の人々に向けて見せるという点を意識した一種の観光コースを用意しており、紀行文や見聞記の内容が深まりにくいという問題点は否定できない。

17
11に同じ

しかし、だからこそ見たもの、聞いたことをどのような語り口で伝えるかという点で訪中記の相違が見られるのではないだろうか。「お客」という招かれた立場で、また見学可能な限られたコースのなかで、それぞれどのように「新中国」を語るのかという点は重要になる。

1955年4月21日に香港から中華人民共和国に入った火野の訪中団一行は、その後広東、漢口、北京などを訪れる。その後火野を含む団員の一部は、5月17日から26日の期間北朝鮮を視察し、5月27日から再び北京、上海などを回る。その後香港経由で6月9日に日本へ帰国するというスケジュールであった¹⁸。このうち『赤い国の旅人』は4月21日から5月4日までを日記形式で書いたものである。

18
鶴島正男「新編 火野葦平年譜」『紋説』
13、1996.8および『赤い国の旅人』参照。

火野の訪中は、前述したように中国側の「民間外交」が盛り上がりを見せていた時期に、日本代表の一員に選ばれ「アジア諸国会議」に参加したという偶然が重なり実現した。しかしながら、中国再訪は敗戦後の火野にとって前々からの願いであった。1947年に『月刊西日本』が行なった「行ってみたい外国」というアンケート¹⁹で、火野は1番目に「アメリカ合衆国」、2番目に「中華民国、フィリッピン、ビルマ」を挙げている。このアンケートでは、火野を含め7名が回答しているが、他の回答者がアメリカやスイス、スウェーデンを挙げているのに対し、アジアの国を挙げたのは火野のみであった。1947年当時、中国が「中華人民共和国」となる以前であったため、中国へ関心を持つ人々はそれほど多くなかったのかもしれない。しかし、火野は「勝利者としての短い期間あった国に敗北者としてわたり、その差の中に教訓を得たい」²⁰という思いを持っていた。

19
「行ってみたい外国」『月刊西日本』
4(2)、1947.2

アンケートから8年後、図らずも「新中国」となった中国を訪れることが実現するのだが、そこで「敗北者」としての「私」は何を見て、どのように中国を語るのだろうか。次章では『赤い国の旅人』で描かれた「新中国」を見ていく。

20
19に同じ

3. 1950年代半ばの訪中記と『赤い国の旅人』

1950年代半ばは、訪中者による様々な「新中国」の紀行文や見聞記がもたらされた。それらは、訪中者（書き手）の立場によって、全面的に称賛するものから、発展状況や現状がいまだに低水準であると貶すものまで様々であった²¹。しかしある程度共通して見られる話題として、ハエが消えたことや売春婦が

21
加藤正三編『ニツの中共』今日の問題
社、1956

一掃されたこと、見学をした工場についての報告や、「新中国」の大学制度と日本の学生との比較、信仰の自由はどのくらい保障されているのかなどがある。これらは、『赤い国の旅人』にも書かれる。

では、本作品が当時の他の訪中記と異なる点はどこにあるのだろうか。以下この点について、他の訪中記と比較しながら考察する。なお火野が所属した訪中団の他の団員による報告文や訪中記は、特定の分野における報告、例えば経済問題や農業の現状に特化したもの²²はあるが、特定の分野によらない「新中国」全体を報告するものは管見の限り見当たらない。そのため本稿では、火野と同様に敗戦以前に中国を訪れた経験のある人物かつ、1950年代半ばに中国から招待を受け訪中団の一員として再訪した人物による訪中記を参照する。

まず本作品の特徴として、一貫して描かれる「私」の罪の意識や中国に対する恐ろしさがある。

十六年ぶりである。昭和十三年十月十二日、バイアス湾に敵前上陸し、十月二十三日、広東に入城して以来、翌十四年十二月まで私はこの街で暮した。無論、兵隊として、占領者として。しかし、広州駅の表に出ると、なつかしいというよりも、恐ろしいところに来たような奇妙な気おくれを感じた。十六年前の思い出が或る苦しさをともなって、一挙に私の脳裡で回転した。[4月21日、p.106]

兵隊の時代に、中国人からうらまれることはしていなかつたというだけのようなことは、一人よがりにはすぎない。占領軍の一員であったというだけで、私が日寇の一人であり、鬼子兵であるにちがいないからである。私は中国にわざわざ拷問をかけられに来たような気がしはじめた。[4月22日、p.130]

敗戦後再び中国の地を訪れた「私」は、「なつかしいというよりも、恐ろしい」「奇妙な気おくれ」「苦しき」を感じないではいられない。日本では元兵隊としての自分がどのように評価されたとしても、また自分自身が戦時中の自分どのように評価しようとも、中国という空間の中では「鬼子兵」以外の何者でもない。訪中当初から中国に来たことを「拷問にかけられに来た」のではないかとし、その重苦しい気持ちが吐露される。

多数の日本作家がベン部隊としてこの地にやってきたことがある。そういう人たちがいま新中国へ旅して来ればどんな感慨をもつであろうか。私は罪の意識におののき、拷問にかけられたような苦しさにとざされているが、他の諸兄はいかがであろうか。[4月24日、p.140]

『赤い国の旅人』では、「私」が感じる重苦しさや身の縮む思いといった内面が言語化され表出する。そしてそのような自分の内面と向き合い生じた思いは、日中戦争で活躍したベン部隊の作家たちをはじめとする、当時中国にいた人々

22

経済問題を扱ったものに小林義雄「中国における私的資本とその改造問題」『政経月誌』31、1955.7などが、農業問題を扱ったものに吉岡金市「中国の農村を訪れて」『農業朝日』10(8)、1955.8などがある。

にとっては感じないではいられないものなのだろうか、相手側へ投げかけられる。しかしこの問いへの応答が作品内に描かれることはない。「私」の所属する訪中団の団員の中には、戦時中に中国にいたとされる人物も何人かいるのだが、彼らが昔の中国に対する思いを語ることはなく、結局「私」の感じる恐ろしさは「私」の中でのみ完結せざるを得ない。他の団員が自身の思いを語らないように、当時の他の訪中記にも、重苦しさが語られないという点は見られる。

例として、戦時中軍人であった人々による「元軍人訪中視察団」が1956年8月から9月に中国を訪れ、帰国後書いた訪中記を取り挙げる。元陸軍少佐であった犬飼總一郎は、敗戦後再び中国を訪れたことを以下のように語っている。

羽田出発以来、そして深圳の国境通過以来、外国へ旅行するという気持ちをもっていない。それどころか、ひさしぶりに隣村へ来たのだといった気易さが、日ましにつるばかりである²³。

「私」と同じようにかつて「軍人」という立場でいた人物が再び中国に足を踏み入れるとき、それは重苦しさではなく「ひさしぶりに隣村へ来たのだといった気易さ」として感じられている。そこでは戦時中の自分の行為や、なぜ他国である中国に自分がいたのかという考えと向き合うのではなく、単純に懐かしさに浸っているのだ。他にも中国と再会した際に感じる懐かしさについて述べた以下のような訪中記もある。

遠くにガンが群れ飛んで村落に入る。アヒルを追う農夫の姿、黒いパークシャの種の家猪(豚)の群、取入れを待つ綿花畑などを見るにつけても、私たちの胸には第二の故郷に足を踏み入れたという身近な、郷愁がわく。かつては、他人の国ではなかった。心をくだき、義を捧げ、命をおしまぬ愛情で、この広野の開拓に参画した、これが全日本人のノスタルジアではなからうか。過ぎにし日の思い出が、メンメンとして止めどなく私の胸を去来する²⁴。

これは1954年9月から6月に、国会議員による視察団が戦後初めて公式訪問した後、団長の山口喜久一郎によって書かれた訪中記である。戦時中侵略行為によって東北地方を占領していたわけだが、ここでもそのような侵略行為自体が省みられることはなく「かつては、他人の国ではなかった」中国という捉え方がされている。そのため「第二の故郷」「ノスタルジア」といった言葉で、懐かしさが無邪気に表出されており、そこには昔を思い出し感じる重苦しさなどないのだ。

元軍人による訪中記は、各筆者が書いたものをそのまま編集しており²⁵、国会議員の山口による訪中記は、「紀行の在りのままの中にいささかの感想を加えた」²⁶ものである。編集者側も、実際に中国を訪れた人が直接見て、聞いて、感じたことにこそ価値を見出し、余計な手を加えず読者に伝えることを重視する方針を取っている。そのような中で、『赤い国の旅人』に書かれた重苦しさ

23

犬飼總一郎「中国の子供」(遠藤三郎他著『元軍人の見た中共』文理書院、1956、p.132)

24

山口喜久一郎『保守党から見た新中国』読売新聞社、1955、p.41

25

遠藤三郎他著『元軍人の見た中共』文理書院、1956、「本書の編集について」p.5

26

24に同じ、「はしがき」p.1

とは対極的な、「隣村に来た」ような「気易さ」や「ノスタルジア」を語る言説が同時期に存在したことに着目したい。「私」は戦時中に中国にいた人々は、この度の訪中でどんな感慨を持つのだろうかと問いかけるが、「私」の抱く感慨と重なる者ばかりではないのだ。

『赤い国の旅人』内では、他の団員と戦時中の中国への思いを語り合う雰囲気にはならないが、これは敗戦から約10年後の日本人にとって中国とは戦時中の自身の行為と向き合う場所ではなく、一種の郷愁に浸れる場所であったことも関係しているのだろう。中国との再会によって生じる思いは大きく異なっている。

次に『赤い国の旅人』が新しい中国にいながら、戦時中の中国やそこでの思い出をよみがえらせながら描かれている点について見ていく。これは、他の訪中記が「新中国」の様子やその著しい発展に重きを置いており、戦時中の中国との連続性という観点から報告するものがあまり見られないことと比べても、本作品の特徴だと言える。

中山路と永漢路の交叉点に出たとき、左手に一つの黒ずんだ大きな建物が見えた。私ははっとした。[中略] それらのこと [「花と兵隊」「広東進軍抄」などの執筆：引用者注] は、中国人にとっては私が占領軍の一員、日本帝国主義の手先として広東の地をけがしたことに外ならないのであるから、私は若い作員たちに対しても小さくなっていなければならぬ気持だった。戦跡行脚などという感傷はこの国では許されないのであった。その建物にちょっと行ってみたいという衝動は弱くはないけれども、それはいえなことなのである。[4月22日、pp.116-117]

「私」はかつて創作活動を行った思い出のある場所に、今回の訪中で再び近づくことができた。しかし、なぜそこで作品を書いたのか、なぜそれが日中戦争を舞台とするものだったのかと考えると、日本の侵略行為に加担したことは否定できない。以前の生活があった場所として、この「黒ずんだ大きな建物」に「ちょっと行ってみたい」という気持ちは湧き上がるが、それは中国側から見れば許されることではないのだと、直ちに打ち消されてしまう。戦時中の思い出がよみがえりながらも、その思い出に長く浸ることを戒める。そこには再訪行為が「私」に与える感情の昂りを、離れた視点から冷静に押さえ込もうとするもう一人の「私」が同時に存在するようでもある。

過去の思い出との再会は、時には「私」の身構えていなかったところでも生じる。夕食時「私」の前に来た「李徳純」から一高在学中に『麦と兵隊』を読んだと話しかけられる。

私は赤面した。同時に昏迷した。警戒心とはちがうが、私の「麦と兵隊」を読んだという言葉が、赤い国のなかで赤い青年によって語られることは私をすくませるのである。[中略] 私はなにも弁解しようとは考えないので、

誰がどう思ったところでよかったが、やはり、中国人から私の戦争中の作品(特に、中国を戦場とした作品)について語られることは、私を当惑させた。しかし、李さんはなにも私を追求したり、私の反応をみたりする様子はなく、親しみのある調子で思い出話をしているにすぎないように思われた。
[4月21日、pp.104-105]

この「李徳純」とは文学好きが高じ、後の文化大革命では困難な時代を過ごしながらも日本文学研究を続けた人物である。井上靖、川端康成などの作品翻訳に従事し、日中文化交流に多大なる貢献をしていく。生まれは中国遼寧省だが、小学生時代から『少年倶楽部』を愛読し東京から書籍を取り寄せるなど、日本文学に親しんできた²⁷。彼を単なる中国人読者に括ることはできないだろう。

27
李徳純著、杉山太郎ほか訳『戦後日本文学管窺』明治書院、1986、「あとがき」pp.263-265、「著者略歴」参照。

「私」にとってそのような人物と自分の作品について話し合える機会を中国で得たことは、非常に稀有なことであったと言える。ただし、話題に挙がった『麦と兵隊』は「私」を「兵隊作家」として一躍有名にした作品であり、日中戦争を描いた代表作でもある。そして「李」は「親しみのある調子」で話しかけているのだが、「私」にとっては、中国人読者が『麦と兵隊』を語ることに「当惑」せずにはいられない。火野の訪中から約20年後に実現する1972年日中国交正常化以降、両国の文化交流を牽引する人物の一人となる中国人日本文学研究者と、『麦と兵隊』について語り合うには至らなかった。

一方で、「私」は相手が自分を責めたてるためにこの話題を持ち出したのではないと冷静に判断した上で、自分が「当惑」しているのだとその内面を言語化し語る。このような「私」の落ち着きを考えると、自分にとって中国との再会で思い出したくない出来事は書かないという選択もできたはずだ。

しかしながら、『赤い国の旅人』では昔の自分に触れられることから逃げ出したくなりながらも、戦時中の言動をなぞるように「新中国」を描いている。このような描き方は、元「兵隊作家」である火野が中国を再訪するという状況に当時の読者が期待したものであったと言える。反対に、戦時中に中国と関係のあった人物が、「新中国」を訪れても過去の出来事と結びつけて書いてはいないからこそ、多くの訪中記が出されている中でこの点が『赤い国の旅人』の新しさや価値につながる。

では他の訪中者にとって過去とはどのように振り返り、記述するまたはしないものであったのだろうか。

東北に一歩踏み込むと、もはやわれわれは心の平静を保つことが困難になる。日本とは切っても切れない過去のつながりがあるからだ。日本人でも、昔の満洲を知らない人には、このような感慨はないかも知れないが、少なくとも私にとっては耐えられない程の苦痛を伴う。こんな気持になるとは、この日まで夢にも感じたことはなかった。[中略] 過去の遺産が中共に受けつがれて、一層発展している場合には、まだ気も安まるのだが、

昔よりさびれているときには、やりきれない気持になる。まして廃墟と化しているときには、いたいたしくて眼をそむけたくなる²⁸。

28
23に同じ、p.142

元陸軍少佐の犬飼にとって北京以南の地域は身構えることなく訪れることができるが、「満洲」のあった東北地域では「心の平静を保」ち辛い。この困惑は犬飼のみのものではなく、「われわれ」という言葉が表すように団員同士共有可能なものであった。犬飼の参加した元軍人による視察団には1956年の訪中以前に中国と関係のあった団員も多数いた。ただし、ここで生じた落ち着かない心持ちや「耐えられない程の苦痛」の要因は、『赤い国の旅人』の「私」の場合とは異なり、開拓を進めていた土地を敗戦によって手放すことになった点にある。日中戦争により、かつて多くの日本人がここ中国の東北地方で生活していた痕跡を目にして感じる思いが、加害者意識に結び付けられて語られるわけではない。

確かに「満洲」は居住地としての空間であったことから、戦場としての空間とは異なる性質を持っていることは否めない。しかし日本が敗戦国となった後の再訪でありながら、なぜこれらの訪中者は罪の意識に苛まされることなく過ごすことができたのだろうか。その理由の一つに当時の対日政策であった「二分論」²⁹がある。軍国主義者と一般人を分けるというこの考えに、接待する側の中国人は徹した。

29
13に同じ

『赤い国の旅人』では、日本を褒める「趙」に対し、他の団員が日本や天皇の悪口を言い、「新中国」を賞賛する。なかには日本の侵略行為を「和寇の昔まで引っぱりだして」謝罪をする者もいる。しかしこのような日本側の極端な振る舞いに対し、同席していた「于」は深く取り合わず「これから手をにぎりあって行けばいい」と鷹揚な態度を取るのだ³⁰。同様の場面は他の訪中記にも見られ、過去を水に流し将来を語りましょうと言われると、謝罪しようとした本人も納得してしまい、自分の罪の意識はあまりにも簡単に消えてしまう³¹。

30
『赤い国の旅人』p.221

31
遠藤三郎「軍人の見た新中国」『世界』123、1956.3

また日本側にも過去の行為と向き合うことを遮断させてしまう要因がある。当時、訪中者の増加に伴い需要のあった中国の旅行ガイドブックが出ている。しかしその中の「エチケット」という項目では、中国に対し「あまり過去にこだわりすぎ卑下する必要もなし」ということが取り上げられている³²。1950年代半ばの訪中は、中国側からも日本側からも戦中の侵略行為と真摯に向き合う形で行われることはなかった。そして『赤い国の旅人』の中で「私」は、自分の内面を言語化し饒舌に語るが、それが謝罪という形で外に出されることはない。ただ「私」は他の団員や接待する中国人の観察者となるのだ。

32
新中国旅行案内編集委員会『新中国旅行案内』極東書店、1958、p.142

それは「私」の感じている重苦しい思いや、戦時中の自分と中国との関係を外に出したとしても、決して取り合ってもらえるわけではないということを感じているからではないだろうか。昔のことはもう気にしなくて良いと言われるとわかっている上で、謝罪をして満足するのではなく、敢えて自分の内面で煩悶することを選ぶ。「新中国」で感じたことを言語化した自分の内面を外に出すことで、その思いが軽薄化されてしまうことを避けようとする。

4. 「私」にとっての「新中国」

以上のように、「私」が戦時中の自分を振り返りながら中国を見ていることを述べたが、では、現在の「新中国」に対して「私」はどのような判断を下すのだろうか。前述したように中華人民共和国となった中国の情報に、当時日本国内の人々は関心を寄せていた。様々な紀行文や報告記がもたらされた一方、その中身は書き手によって大きく異なるものであった。そのため、何が公平な目で見た「新中国」の姿なのかということが話題となる。以上のような状況のもと「私」は偏見なくその実態を掴みたいという思いを抱き再訪する。

しかしながら、当初の決意とは裏腹に「新中国」で過ごせば過ごすほど、「私」はわからないという思いを募らせることとなる。

迷ってばかりいたのでは仕方がないけれども、信念とか、誠実とか、感動とかいうようなものまでが信じがたいという経験をしてきた後では、迷うことだけが支えであり、人間に許された特権のような気がして来るのである。しかし、迷いにも勇気があるし、迷いの苦しみの深さは、断定の明快さとくらべて数倍だ。新中国は私の眼に、迷いのない明快な国と化したように映っている。しかし、そのかがやかしい断定の背後に、はたしてものはやなんの迷いもないであろうか。[4月30日 pp.213-214]

戦時中、中国にいた「私」は自分が中国にいることに何の疑問も抱かず、戦争に従事していた。しかし、敗戦を迎え戦争が「信念とか、誠実とか、感動というようなものまでが信じがたい」という経験になった。そんな「私」が「新中国」に対して出した答えは、「迷い」という曖昧な方法である。無論、そこには今回の訪中の形、すなわち中国政府が招待し、観光客向けの滞在スケジュールを旅費を負担してもらい過ごすという形式も関係しているだろう。公平に見ようとした中国の姿は、中国側の見せるための姿に他ならない。

それでは1950年代半ばの他の訪中者たちは「新中国」の思想体制についてどのように捉えていたのだろうか。前述した「元軍人訪中視察団」の一人遠藤三郎は「共産政権の革命と圧制により国民大衆は強硬し萎縮し暗い影はないのか」判断するために民衆の顔色を見たと言及する。そこでは老若男女が都市／農村関係なく明るい顔をしており、圧制や密告などを想像させるような暗い影は見受けられず、毛沢東政権を「合格」だと判断する³³。

また同じく前述した国会議員の山口喜久一郎による訪中記では³⁴、自由討議と言っても政府の方針に追従する内容であれば許されるが、批評するものは許されずこれは新聞報道や論議の場合も同様だと報告する。ただし山口はこの状況に対し疑念を抱くのではなく「今まで腐敗墮落していた中国を、ひきい治めるためには、このくらいの厳しさは当然であり、妥協していたら根本が崩れるだろう」と評価する。

両者とも「新中国」のあり方に対し評価を下そうという意識があり、評価内容

33

遠藤三郎「立ち上がる新中国」(遠藤三郎他著『元軍人の見た中共』文理書院、1956、pp.26-28)

34

24に同じ、pp.115-116

こそ違いがそれぞれの中で結論を出し、訪中記の中で明言していく点は共通している。そこには『赤い国の旅人』の「私」のような「迷い」や、わからなくなってしまうという戸惑いはない。

同時代の訪中者とは異なる「私」の立場は、簡単に良し悪しの判断を下すことの危うさ、「国」というもののあり方の複雑さを戦争によって経験し、その経験から目を逸らさずに向き合ったからこそ取れるものと言える。敗戦から10年が経ち、中国・日本両国とも大きく変化していく中で「迷い」という評価を提出することは、1950年代半ば以降の日中関係を考える上で意義のあるものなのではないだろうか。

特にこの「私」の「迷い」の必要性を明瞭にする存在として、「常久」という登場人物がいる。戦時中兵隊として中国にいた「私」を、何かと目の敵にして突っ掛かってくる「常久」だが、彼自身も戦時中は軍お気に入りへの鉄道技師として中国に滞在していた。しかし、本人は今回初めて中国を訪れたかのように振舞う。そして、終始「新中国」のあり方を絶賛し、日本を卑下する。

また「常久」は終戦直後に共産党に入党したものの、旗色が悪くなると社会党に転党し分裂後は右派にいたが、インドに向けて出国する直前に左派になったという日和見主義的な人物である。このような「常久」の設定に対し、先行研究では「あまりにも類型的な悪役として描かれ過ぎている」³⁵として、批判するものもある。

しかし「常久」という「新中国」に対して明瞭な立場をとる人物を設定することで、「私」の「迷い」の立場との対照性がより明確になる。『赤い国の旅人』の登場人物は、実名と偽名が混在していることが指摘されているが³⁶、実際の訪中団の団員の中に「常久」という名前の人物はいないため³⁷、どこまでが実際の人物をモデルとしているのか、または完全に創作された人物なのかはわからない。だが、その場その場で自分の立ち位置を簡単に翻し、初めから疑うことなく「新中国」を褒める「常久」という設定があることで、「私」が取る「迷い」の立場の重要性が際立つ効果をもたらすのだ。

「私」は「新中国」と再会し、「迷い」という方法を提示する。敗戦後10年が経ち社会が変化していく中で中国を語るとき、多くの紀行文では「新中国」の新しさばかりに目を奪われてしまいがちであった。そのような中『赤い国の旅人』では、戦時中の「私」を振り返りながら、今の中国を見ようとする。そこで出された「迷い」は、過去を忘れ新しさや変化を追い求めようとするあり方に疑問を投げかける機能も果たしているのだ。「新中国への批判が中途半端」³⁸だとも指摘されているが、当時の他の訪中記に見られる「新中国」への明快な結論を出そうとする傾向と比較すると、結論を急ぐ危うさを「迷い」や戸惑いという形で繰り返し語る「私」こそ今一度評価されるべきものであろう。

35
藤原耕作「『赤い国の旅人』—華平の見た中国」『敍説』13、1996.8

36
6に同じ

37
「アジア諸国会議日本代表団動静のお知らせ」(『アジア諸国会議』関係(HA8-0001)北九州市立文学館所蔵)に書かれた訪中団一行の名前を参照した。本資料に書かれた「一九五五年五十三日」という日付からも火野の参加した訪中団の情報であると言える。

38
35に同じ

5. おわりに

従来『赤い国の旅人』は「火野葦平」という作家研究の中で取り上げられてきた。火野と中国との関わりは、この作家を考える上で無視できない。一方で本稿では「私」の語りや登場人物の設定といった創作部分に着目し、同時代の他の訪中記と比較することで、作家の個人的経験のみに還元されるだけではない作品の位置付けを検討した。「私」にとって「新中国」を語る際、戦時中に兵士として中国にいた経験を切り離すことはできない。同時代の訪中記が「新中国」に対して何かしらの評価を下す姿勢で書かれたことに対し、過去の自身を踏まえて現在の中国と接する「私」は「迷い」という態度を繰り返す。

「私」の中で湧き上がる重苦しさや「迷い」という態度は、中国で出会った人々とはもちろんのこと、同じ訪中団の団員にも共有されることはなかった。しかし、このような思いが訪中記の中では言語化され、繰り返し語られる。実際の会話としては成し得なかったことが、作品という媒体を得て言語化されることで「私」の内面は自己の外側へと表出可能になったのだ。

以上のような本作品は日本文壇における火野葦平の再評価にもつながった³⁹。そもそも「兵隊作家」であった火野の訪中自体が他の文学者たちに驚きを与え、注目された。小田切秀雄は『新日本文学』のメンバーとの座談会⁴⁰で、火野が中国へ行くことも、中国が火野を招待することも疑問に感じたと述べる。その上で、『赤い国の旅人』を「意外だったな。非常にいいというものじゃないが、おもしろかった」と、好意的に受け取っている。この点については、敗戦直後「もはや火野葦平は再起不能だろうという見通しがあった」平野謙も認める。

このような文壇状況から、訪中当時に他者と共有されることのなかった自己の内面は、作品を通じて確かに他者へと届いたと言えるだろう。『赤い国の旅人』は戦時中の火野と中国の関係性を踏まえて読んだ当時の文学者にとって、「火野葦平」という作家の戦後再評価への契機にもなった。

また本作品は戦後日中文化交流に中国側で携わった人々についても描かれている。前述した「李徳純」はのち、中国社会科学院外国文学研究所員、中国日本文学研究会理事を務め、日本大学客員教授として1982、85年に、日本学術振興会の招待で1994年来日している。その活躍は中国国内のみならず、日本国内でも見られる⁴¹。戦後日本文学研究や翻訳活動を通し、両国文化交流の橋渡し役として活躍した重要な人物である。

また「私」が日本語能力の高さに幾度も感嘆する通訳の「蘇琦」はのち、北京第二外国语学院教授、中国日本語教学研究会副会長、中国翻訳家協会理事などを務め、通訳、翻訳の両分野で活躍する。さらに若手の育成にも尽力してきた。日本国内では1950~70年代の「日中通訳」開拓時代を代表する人物として紹介されている⁴²。

1970、80年代以降日中両国で社会的地位や影響力を持った人物が、要職につく以前の時期に両国交流のために尽力していた姿を『赤い国の旅人』は書き

39

民主主義文学陣営における火野の再訪および『赤い国の旅人』評価については、田中艸太郎が言及している。(田中艸太郎『火野葦平論』五月書房、1971、pp.158-173)

40

中島健蔵、野間宏、平野謙、中野重治、岡本潤、小田切秀雄「(八) 組織と責任」pp.227-228 (中島健蔵、中野重治編『戦後十年・日本文学の歩み』青木書店、1956)

41

経歴については増田周子「火野葦平『赤い国の旅人』の成立と新中国認識」『関西大学東西学術研究所紀要』44、2011.4でも紹介されている。本稿では増田論の資料に加え、李徳純著、杉山太郎ほか訳『戦後日本文学管窺』明治書院、1986、李徳純「同時代と真摯に向き合う 大江文学中国的視点から」『朝日新聞』夕刊、1994.12.17、p.9を参照した。李による新聞記事への寄稿は度々行われ、文学研究者ではない新聞の読者もその言説を目にする機会があった。

42

経歴については増田周子「火野葦平『赤い国の旅人』の成立と新中国認識」『関西大学東西学術研究所紀要』44、2011.4、劉心武著、蘇琦訳『北京下町物語』恒文社、1993、訳者略歴を参照。人物評価については塚本慶一『新版中国語通訳への道』大修館書店、2013、p.24を参照。

残したことになる。本作品は日本の文壇における火野葦平の評価に影響を与えただけでなく、後の時代の日中文化交流、友好関係構築へのつながりをも垣間見せるのだ。「新中国」の情報を渴望した1950年代の日本国内において、当時の訪中記がその実態報告や「新中国」の評価に重点を置いたことに対し、本作品は読者に敗戦で途切れるわけではない中国との関係を考えさせる契機を与えた。さらに、1950年代以降の日中文化交流にまで目を向けることのできる作品として位置付けることができるだろう。

以上、本稿では『赤い国の旅人』を通して、戦地再訪経験を言語化し作品として書き残したことの意義および、本作品が1950年代半ばの日本における日中関係にとどまらず、その後の文化交流をも考える作品として位置付けられることを明らかにした。

本研究は、JST次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP2125の財政支援を受けたものです。この場を借りて「東海国立大学機構融合フロンティア次世代研究事業」に御礼申し上げます。